



平成22年5月12日

さくしん

(校長室だより22)

下水鉤小学校

校長 大内 徹

風薫る五月、保護者の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。先月末までは肌寒い日も続いておりましたが、気候もかなり落ち着いてきました。ロータリー前の春花壇には、パンジー、ビオラ、デイジー、ワスレナグサ、ストックなどの花が、赤白黄紫と色とりどりに咲いて私たちの目や心を癒してくれております。購入した種を苗まで育て植えたものであるだけに、係の先生や緑化委員会の子どもの心配りやご苦労はさぞかし大変だったであろうと思われます。校門から昇降口にかけての通路の両脇にもプランターの花が私たちを迎えてくれております。そのような環境を用意して下さっている方々のお気持ちが大変温かくありがたく感じられます。また、本校には千本近くの樹木が植わっていると聞いておりますが、現在、白とピンクのハナミズキ、赤白のボタン、白色のしゃが、紅色のつつじなどが一斉に咲いております。どの花もそれぞれの大きさや色・形・香りで、美しく咲いています。草花や樹木等の自然に接していると、心が癒されるばかりでなく教えられることが沢山あります。草花同様に、本校の子ども達がそれぞれ持ち味を発揮できるよう、しっかり見守りながら丹精込めて育てていかねばならぬと自戒しております。

さて、四月に入学してきた1年生も小学校生活にだいが慣れてきたようです。下校時の1年生に話しかけると、一頃は「どこのおじさん？」と言われることもありましたが、最近やっと「校長先生、絶好調?!」という声が返ってくるようになりました。お陰様で、珍しく風邪をひいて不調であった私も絶好調になってしまいました。このようなことを言っていると、いい加減な校長だと言われてしまいそうですね。そうでした。先日のPTAの総会では、「いい加減で」というお話を申し上げました。復習してみましょう。

私は元来いい加減な人間であり、家でも家内から「いい加減ね」とよく叱られておりますが、子どもを育てるにあたり、心がけていることは「いい加減」でありたいということです。いい加減ではありませんよ。好い加減(よい程あい)ということです。私たちは、炊くご飯もタイマー等の装置のお陰でいい加減にすることができます。エアコンやストーブも設定さえすればいい加減に快適に室温を保ってくれます。何でもよい加減というものがあるのです。子育てにもこのことは当てはまりそうです。ただ私たち親が子どもを育てる時にはサーモスタットのようなものはないのです。子どもがテレビやゲーム等の遊びに熱中しすぎると、熱を冷ますようにサーモスタットが働けばよいのですが、現実には難しいですね。日頃から子ども達が心身ともに「よい加減、よい状態」を保てるようにまわりが意識的に見守っていかねばなりません。見守るということは難しいことでもあります。放っておくということ、放任ではありません。信州の方言で「ずく」が要ります。ただ放っておいても子どもは育ちません。かと言って、余分な口出しや過度に世話をやくことも子どもの自主性、自立心、やろうとする意欲を削いでしまいがちであります。我が子が今どのような気持ちで、どんな思いで、事に当たっているのかを知り、何気なく見守りながら時には行き過ぎのないように、時には危険な状態に陥らないようにと、適切な言葉がけをしていくことが大切です。認めたり褒めたりすることも大事ですが、日頃の子どもの様子から目を離して、子どもの出したある結果だけを取り上げて、「良かったね。頑張ったね」などと褒めてみても、真に子どもの心に迫るものとはなりません。子どもとの時間を大切にしながら、子どもの取り組んだ過程をしっかりと見守った上で発する褒め言葉や、励ましの言葉はどこか違ってくることでしょう。日々しっかり見守りながら、本校の子ども達が心も体も健全にすくすくと育つように、私たち自身が子どもにとっての望ましい教育環境となれるように、お互いに努めていくことができると願っております。

以上枠内は、PTA総会・校長講話のいい加減な抜粋であります。子どもをいい加減に育てる一助になれば幸いです。「いい加減にしる」なんていう声は聞こえてきませんよね。

話は変わりますが、連休前のある朝、校門前信号機の脇にヨーグルトジュース(?)のプラスチック容器が転がっていました。児童の登校時だったので、私はとりあえずそれを信号機の支柱の陰に置いておきました。石ころで押さえておいたのですが、風でカラカラと歩道の真ん中に転がろうとします。通り過ぎる子ども達はなかなか気づきません。気づいているのかいないのか、そのまま行ってしまします。片付けられるようお願いしようかなと思いつつ、でもだれか気づいて持って行ってゴミ箱に捨ててくれるのではないかなあと子どもの気づきに期待してみることにしました。7:52~7:57にかけて境方面から子ども達が多数横断して来ました。子ども達に気をとられながら朝の声がけをしているうちに、私は路上の容器のことはすっかり忘れかけていました。子ども達が全員渡り終わった頃、「さて」と足下を見やると、ついさっきまで転がっていたはずの容器がどこを見ても見つかりません。きっとだれか拾って片付けてくれたのです。さきほどまで、ポイ捨ての容器のことが気になっていただけに、「気づいて拾って片付けてくれた子がいたんだ。ああ、よかった!」と大変嬉しい気持ちになりました。

今は物騒な時代です。物によっては触ったり拾い上げたりしたばかりに、怪我をする事さえあります。ジュースのアルミ缶や容器くらいでは危険なことではないとは思いますが、他人が飲んで路上にポイ捨てしたものを拾ってわざわざ片付けるという行為は簡単なことではありませんね。買い物や用事で目的地に向かって歩いている方に、落ちているゴミや缶を拾うことを期待することには無理もあり、それは現実的ではありません。結果的に、路上や庭前に捨てられたゴミや缶は住民のどなたかが片付けることになるのでしょう。毎朝の通勤時、道ばたのゴミや缶を拾っている方を時折見かけます。大塚から稲里地区にかけてボランティアでやっている方がいらっしゃいます。ありがたいことです。学校の道德の授業でも公共心を学ぶ機会がありますが、外に出た時には、少なくとも他人様に迷惑をかけることのないように、目に余る言動については随時指導していきたいものです。

先月の26日(月)に本校中庭の水路に、ホタルの幼虫百匹余りを児童会代表委員・飼育委員の子ども達の手で放流しました。ホタルの幼虫は長野ホタルの会・会員の羽田さん(戸隠下祖山在住)から分けていただきました。昇降口の水槽の脇に実験用のシャーレを置き、その中にあるホタルの幼虫を虫眼鏡ではっきりと観察できるようにしました。初めて目にする幼虫に興味深く観察しながら、「どっちが前なんだろう」「雄と雌の違いは?」「なんでギザギザしているのかな」等、多くの疑問や発見があったようです。放流の様子にはNHKやa b nのテレビニュースや信濃毎日新聞、読売新聞、市民新聞等でも伝えられました。中庭の水路もだいぶ自然になじみ、敷き詰められた石も緑色に染まり、大きな石の表面には川蜷(かわにな)の赤ちゃんが数え切れなくらい生み付けられています。水温15~16の井戸水にうまく適応しているようです。私が二抱えほど持ってきたクレソンも驚くべきスピードで増え続けております。自然環境や生態系は人間の手で思うようにいかないものではありますが、一匹でもホタルが舞ってくれるといいなあと願っております。

校長室の水槽でも川蜷を飼育しているのですが、遊びにきた4年のN君が、「でも、川蜷はホタルに食べられてしまうんでしょう。勿体ないな・・・」と、「勿体ない」を何回も繰り返しておりました。水槽にへばりついたり、キャベツを食べたりしている川蜷を見ていると次第に愛着も出てくるようです。水槽や水路の川蜷がホタルに食べられてしまうことを考えると、川蜷が可哀想に思えてくるのも当然のことです。川蜷等を食べながら、ホタルの幼虫も1令期~5令期まで脱皮を繰り返し成長し、上陸後、すぐ土にもぐるか土繭(マユ)をつくりまします。土マユの中で蛹(よう)化し、サナギから羽化して、初めて地表に顔を出します。地表に出てから黄色い光を発生しながらのわずか一週間から10日のはかない命です。川蜷からホタルへの命のつながり、自然界の摂理を学んでいくことができればと願っております。たまたま本校でホタルの郷再生事業と出会ったのが縁で、私も長野ホタルの会に入会しました。(興味や入会希望のある方は、ご一報下さい。)

